

今朝はペンテコステの主日です。使徒の働き 2章から学ぶことが多いのですが、今朝はコリント書第一 2章から御霊の働きについて学びます。

1. パウロの宣教をつき動かすもの (1~5節)

①宣教の源 (1)「さて兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。」使徒パウロは第二回伝道旅行において、アテネからコリントにやってきました。都市の東西を結ぶギリシャの結び目のような所、通商や交通の要衝でした。その町で、アクラとプリスキラ夫婦に出会い、共に福音宣教がなされました。コリント教会が誕生していきますが、多くの信者は異邦人でした。この教会には後に分派や不道德などの問題が起こり、パウロは手紙を書くことになるのです。さてパウロは、ここで宣教の基本姿勢を伝えます。それは、すぐれたことばや知恵を用いてこなかったということでした。パウロの語る言葉には光るものもあっただけでしょう。また、彼には様々な知恵もありました。ここで言わんとしているのは、中身のない美辞麗句でもって、福音を語るつもりはなかったということです。

②キリストにより (2~3)「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことを決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。」パウロの伝えようとした事には、はっきりとした核がありました。それは十字架につけられたイエス・キリストの事を語るというものでした。十字架の福音の意味を語ろうとしていたということです。コリントにいる時、パウロは弱く、恐れおののいたといひます。それほどに緊張感を持っていたということでしょう。いかに相手が優れていても、決して劣ることのない知性と人格を持っていたパウロですが、そのポイントで関わってはならないという思いがあったのでしょう。

③神の力に支えられ (4~5)「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」パウロはその対象者に宣教するにあたって、人間の知恵の言葉をこらした説得の方法はとらなかったというのです。それでは何を礎としたのでしょう。彼は、御霊と主の力を頼りとしていたというのです。宣教とは、御霊の働きの現れでたものだというのです。人がキリストを信じるようになったのは、人間の知恵に基づくのではなく、神の力によったのだというのです。



2. 奥義としての神の知恵 (6~8 節)

- ①知恵を語る (6)「しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。」しかし、もう一方で主からいただく知恵は大切にするというのです。地上の支配者たちは、地上的な知恵に頼るけれど、パウロは別の大切な知恵を語ると述べるのです。
- ②奥義としての知恵 (7)「私たちの語るのは、隠された奥義としてとしての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、神の知恵あらかじめ定められたものです。」それは、「隠された奥義としての神の知恵」というのです。万物が創造される前から定められていたものだと言います。そして、それはどこまでも神に栄光が帰されていくものだと言います。
- ③知恵があったら (8)「この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」この天来の知恵はこの世の支配者たちは悟っていなかったとあります。ポンテオ・ピラトもヘロデ王も大祭司やパリサイ人たちと結託して、キリストを十字架につけるために、審問をし、結果は十字架刑となりました。彼らがもし、神の知恵を求めたならば、そのような結果にはならなかったというのです。

3. 見たことのないものを (9~11 節)

- ①神の備えて下さったもの (9)「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。』」神の知恵について、パウロはイザヤ書 64:4 と 65:17 からまとめています。つまり、神の知恵とは①人が目や耳で感知したことのないもの ②人の心に浮かんだことのないもの、だというのです。神が愛して下さる者たちに、備えてくださるものは、どれもそのようなものだと言います。つまり、神の知恵は、人間が思いめぐらすものとは異なり、天来のものだと言います。
- ②御霊によって (10)「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。」神はいかに主を求める者にこれを与えられるのでしょうか。それは、御霊によって啓示されるというのです。啓示という言葉は「覆いを取り除く」という意味があります。見えなかったもの、わからなかったこと、隠されていたものが、御霊によって明らかになるのです。御霊はすべてのことについて、事柄の本質を見極めさせ、創造主の意図をわからせてくださるのです。神の知恵とはそのようなものなのです。

- ③神のみこころ (11)「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。」人の心のことを、本当の意味で知っているのは、その人のうちに住む聖霊以外なく、神の御心は、聖霊ご自身だけがそれをご存知であるとあります。御霊なる神が、私達の本質を見極めてくださっているのです。

《結論》

今朝はペンテコステ。週報の後ろのページにも記しましたが、聖霊降臨日であり、キリスト教会の誕生日でもあります。例年この日には、使徒の働き 2 章を読むことが多いのです。しかし、今年は御霊の働きに関連して、御言葉を学ぶことにしました。

ここまで学んできましたように、宣教の働きは人間から出た知恵にはよらず、御霊に教えられ、促されてきたのだと使徒パウロは証しているのです。

御霊が働かれる時というのは、言葉が稚拙でも、十分尽くされていなくても、表現力が優れていなくても、人の心の奥底に届いていくのです。逆に人間の浅知恵や格好の面では見栄えがしても、それは用いられないのです。だからといって、何の努力もしないで良いわけではありません。人間の知恵ではなく、神の知恵、隠された奥義としての神の知恵をいただくべく、祈り求めていくことは必要なのです。

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」(9 節)とありますが、私たちからは決して生まれてこない、天来の恵みこそいただいきたいものです。

召された小坂忠師がチャペルコンサートにきてくださった周辺で、小坂夫妻からこの御言葉が出てきました。ちょうど私共も、この御言葉から励ましや力をいただいていたところだったので、共通の主の霊の働きをいうものを感じました。あの当時、小坂師は手術を終えて間もなく、歌えるかどうか保証できず、数曲だけということになってくださいました。しかし、証を交えて、全力で歌ってくださいました。最後の数年は日本のゴスペル音楽を後進を育てることに精力を使っておられたようです。主は私共にも一人の牧師であり音楽伝道者であった人の召天を用いて、この御言葉をもう一度、語りかけ、与えてくださっているように感じました。

神は、覆われているものを取り除き、明らかにしてくださる主です。御霊なる神は、見えざるものをはっきりと見えるようにしてくださり、聞こえなかったものをも聞こえるようにしてくだ

さるのです。

この真理は、宣教に限ったことではありません。私達の人生の課題とな

っていて、どうしても解決がつかずにあること。私達を悩ましていること。創世記のヤコブでいえば、北のパダン・アラムの地にあっても、通奏低音のようにして、絶えず思いの底にある双子の兄弟エサウのこと。それはすでに神に何回も祈ってきたこととはいえ、忘れることができないことでした。あなたにもそうした問題があるのではないですか。その事柄の本質は、御霊なる神のみをご存知です。御霊なる神に取り扱っていただくしかないのです。

ペンテコステの朝にはまさに、宣教についても、私たちの健康や病気のこと、個人的な大きな課題のことも、すべて御霊なる神こそが関わってくださると信じて委ね、導いていただきたいのです。御霊なる神は必ずや備えてくださるのです。「御霊さま、どうぞ道を開いてくださいますように」。